

京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

1. 研究課題

チベットにおけるコミュニケーションツールの研究—書簡文化の歴史的変遷と現代的意義

—
A study of communication tools in Tibet: Continuity, transition, and expandability of the letter culture in Tibet

2. 研究代表者氏名

池田 巧

IKEDA, Takumi

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月

4. 研究目的

チベットにおける書簡には、インド仏教由来の韻文で綴ったスタイルによる手紙と散文で書かれた手紙の二種類がある。このうち、第二の手紙群には、高僧の手になる手紙や政治文書における手紙などのほか、寺院への支援物資に添えた手紙、古代チベット帝国期の通達文書など様々な書簡が含まれる。これらのチベット語書簡は、書かれた時代や目的のみならず、書き手の立場や社会背景、書体や書式スタイルに至る諸要素において異なる性質を持っている。本研究では、様々な性質を持つ書簡を通覧し分析することで、チベットにおける書簡の類型化に取り組み、その意義を検証する。また、現代社会には書簡のみならずeメールやSNS等のコミュニケーションツールが存在する。これらのツールと書簡との関連や相違を明らかにし、現代社会における書簡の位置付けについて考察する。歴史の当事者たちが綴った文字資料であり、正しく扱えば有益な史料となる書簡を分野横断的かつ通時的に比較・分析し、現代のツールと付き合わせることで、コミュニケーションツールの一媒体である書簡の役割を歴史的文脈で再検証し、複眼的視点からチベット社会を見直すことが本研究の主たる目的である。

There are two types of letters in Tibetan civilization: letters as literature written in verse based on the Indian Buddhistic style and letters as correspondences written in prose. The second group includes various sub-types of letters written by priests, political documents, letters attached to relief supplies to temples, etc. Characteristics of these letters vary in the period, purpose and the writer's social background, which represents style and format. This study will examine the historical significance of letters in Tibet by classifying and analyzing letters belonging to various periods. This study will also discuss the position of letters in modern

Tibetan society by comparing the characteristics of letters to alternative communication tools such as e-mail and SNS. Through these attempts, this study will examine the role of letters as a medium of communication in a historical context and review Tibetan society from a multifaceted perspective.

5. 研究成果の概要

当初予定していた研究期間を通じて、班員各位が研究を進めているチベット語の書簡をはじめとする多様な文書の書式と内容について報告を重ね、それぞれのテーマごとに検討を加えて、書かれた文書の地域的、時代的な諸特徴についての理解を深めるべく分野横断的な討論と検討を行なってきた。青木文教が請來したチベット語の書簡の書き方についてのマニュアルの写本については、会読を行うための校本を作成するべく、チベット文字の入力を進め、デジタルテキストとしての編集と整理を行ったが完成までにはまだ至っていない。定例の研究集会を対面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、チベット学の諸分野における班員各位の先端的な研究成果を報告してもらったほか、ゲストスピーカーを招いて最新の研究報告を聞く機会を設けた。研究成果報告書の作成に向けて編集の準備作業を進め、研究の補足と充実を期して、C班として2年間の継続を申請した。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

2023年度にはチベット学の泰斗である山口瑞鳳教授の逝去を受けて7月22日に本研究班が主催するかたちで「山口瑞鳳先生を偲ぶ会 in 関西」を開催した。

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

最終年度を迎える、研究成果報告書の論集を刊行することを目標に、研究報告を積み重ね、批判的な検討を加えてきた。班員並びにゲストの報告者は、これまでに研究班の例会で行なった報告をもとに文章化して論文の執筆準備を進めている。執筆者は研究報告の文章化を行い、研究班では論集のフォーマットを定めて刊行スケジュールを検討し、編集作業に着手する。